九州看護福祉大学紀要
Vol,17, №1, 47-59 (2016)
ISSN 1344-7505

［その他］

アクティブラーニングとして討論を取り入れた授業の有効性

川野　司

【要　旨】

本稿は２年生履修科目「教育方法論」で、アクティブラーニングとして討論を取り入れた授業をデザインし、学生の意欲的な学びを育てることと授業中の活動性を高めることを目的とした実践報告である。大学は教員の専門性を中心にした専門知識・技能を教授する授業が行われるが、大学のユニバーサル化と入学する学生の多様化により、学生の能動的学習を中心にした授業が求められるようになった。そこで90分授業を５セッションに分け、各セッションで意欲的な学びと活動性を高めるために、①プレゼン発表、②グループ討論、③グループ討論の全体報告、④教員の補足説明、⑤授業の振り返りを行った。そして授業中の各活動を検討するために18項目の自己評価とプレゼン、グループ討論、教員説明に対する意見・感想の自由記述を求めた。さらに授業を通してコミュニケーションとディスカッションがどのように変化したかを調べるために、１週と15週においてコミュニケーション不安尺度とディスカッションスキル尺度を使用し、対応のあるｔ検定を行った。自己評価等の結果から討論を取り入れた授業は、対人関係の技能を鍛える場面として機能し、意欲的に学ぶ力を育成することが可能であり、学生一人ひとりの活動性を高める方法としての有効性が示唆された。

キーワード：アクティブラーニング、ケース教材、討論型授業

Ⅰ．はじめに

本稿は教職課程科目「教育方法論」において、学生の学ぶ意欲と活動性を高めるために、グループ討論を取り入れた授業（以下「討論授業」と略）の実践報告である。教職を目指す学生が履修することを考え、授業設計に小中学校のケース教材を使用した。ケース教材は学生に身近で分かりやすい内容なので、ケース教材に含まれる問題点を積極的に考えることができるからである。学生の学ぶ意欲と活動性の有効性を検討するために、授業の振り返りシート（自己評価）とコミュニケーション不安尺度およびディスカッションスキル尺度を使用した[1)]。学生の学ぶ意欲と活動性に関しては、これまで学生主体型授業という文脈で議論されてきた。小田隆治は、学生主体型授業は学生参加型授業や双方向型授業、PBL（問題解決型学習、プロジェクト型学習）やシンプルなグループ学習などの概念とオーバーラップしており、その手法を取り入れたりしていると述べている[2)]。また、大学におけるFD（授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みの総称）が既に定着してきており、学生主体型授業、双方向型授業、協同学習による授業づくりなど、学生のアクティブラーニングを意図した多くの授業が展開されている[3)]。D.W.ジョンソン/R.T.ジョンソン/K.Aスミスは、大学におけるグループとしての学びを深める協同学習の重要性を説くとともに、その授業実践について詳細に言及している[4)]。また、大学のユニバーサル化と学生の多様化に伴い、学生が意欲を持って自ら学習に取り組む授業が求められている。本学学生の多くは卒業後の進路先として、保健・医療・福祉関係の職業に就くが、社会人基礎力としての前に踏み出す力（アクション）、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）などは、職種に関係なく身に付けておく能力・技能である[5)]。また社会活動を進めていくには、望ましい人間関係構築能力が求められるが、人間関係構築に必要なコミュニケーションが不得手で消極的な学生もみられる。

標題の「アクティブラーニング」とは、教員による一方向的な講義形式授業ではなく、学生の能動的学習を取り入れた授業のことであり、社会人基礎力の育成を図るものである。具体的には、授業テーマに関して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考えるとともに、グループの仲間と共に積極的に活動することである。能動的学習については、大学設置基準では１単位授業が45時間となっており、２単位授業では90時間の学習が必要である。授業開講期を15週と考えると、90分授業を２時間と見なし正課授業で30時間を使い、残り60時間が正課外学習となる。１週授業につき正課外学習は４時間になるが、４時間を予習や復習の個人学習にあてている学生は少ないものと思われる。本学授業評価で「この授業の予習・復習の時間は、どれくらいですか」の問いに対する５選択肢（3時間以上、2.5時間、2時間、1時間、30分未満）平均回答は、1.39時間であった[6]。しかし討論授業では、予習レポート作成に２～４時間程度の正課外学習が予想される。正課外学習を確保する意味では、レポート作成は能動的学習を勧める意味から有効であると考える。一方、学生の学びや学習への意欲づけは、その前提としての動機付けが重要であると考え、KellerのARCS動機づけモデル４カテゴリーを自己評価に取り入れた。ARCS動機づけモデルは、心理学的知見をもとに学習活動の効果や効率を高める手法を学習意欲との関係でカテゴリー化したものである。そこで自己評価でARCS動機づけモデルの４カテゴリーを評価項目に取り入れ、学生の学びと動機づけがなされているか否かを検討することにした。Kellerは「ARCSのそれぞれは、関連する動機づけ概念や理論をまとめる役割を果たしている」と述べている[7]。さらにKellerは、ARCS動機づけ４カテゴリーを次のように定義している。注意（Attention）は「学習者の関心を獲得する。学ぶ好奇心を刺激する」、関連性(Relevance)は「学習者の肯定的な態度に作用する個人的ニーズやゴールを満たす」、自信(Confidence)は「学習者が成功できること、成功は自分たちの工夫次第であることを確信・実感するための助けをする」、満足感(Satisfaction)は「（内的と外的）報奨によって達成を強化する」としている[8]。

また標題の「討論を取り入れた授業」とは、授業テーマに対して予習を行い、予習レポートをもとにグループ討論を行う授業を意味している。討論授業は、協同学習の考え方を基盤に据えた授業であり、文脈上は前述D.W.ジョンソンらが述べている大学授業を研究フィールドとした実践研究である。「協同学習の考え方」とは、主体的で自律的な学びの構え、確かで幅広い知識習得、仲間と共に課題解決に向かうことができる対人技能や他者を尊重する民主的な態度を意味する[9]。

本授業は教職課程科目なので教職に就けば、児童生徒や保護者をはじめ地域関係者と望ましい人間関係を築き、様々な人々と連携して教育指導を進めなければならない。人との関係性は経験を通して徐々に習得され磨かれるものであるからこそ、対人技能や他者を尊重する民主的な態度を培うことは授業を通して可能である。そこで、学ぶ力や学習意欲などが高まることを期待し、その成果を調べるために毎回の自己評価を活用した。さらに討論授業は、教科書の問いについて自ら考えること、問題解決のためにお互いの考えやアイデアを出し合うこと、予習での疑問点の解決と内容の深化を図ること、今後経験する可能性がある教育課題に適切な判断と意思決定ができること、討論を通してディスカッションやコミュニケーションの技能と人間関係の感受性を訓練することなどにその特色がある。

以上のことを踏まえ、自己評価は授業の到達目標に関するもの、自ら学ぶ力の育成に関するもの、グループ討論に関するもの、学習に対する意欲づけに関するものなど18項目で構成された。そして討論授業を通して、学生の学びと授業での活動性が高まったか否かその有効性を検証するために、毎回の授業テーマに関するプレゼン発表、ARCS動機づけ４カテゴリー、授業全体の満足度、授業の総合評価、調べ学習や予習時間、グループ討論について自己評価を検討した。

Ⅱ．研究方法

１．対象学生・科目・時期

対象学生は２年生看護学科11名、社会福祉学科

28名の計39名であった。対象科目「教育方法論」は、学校教育に関する教職の内容・方法や教員としての指導のあり方を考える授業である。また協同学習による能動的で活動性を高める内容構成にした。授業の到達目標は、自ら考え自ら学ぶ習慣、対人技能、問題解決の実践力などの習得であり、授業実践の時期は平成27年2学期（９月～１月）であった。

２．授業の進め方

90分授業の１週～15週の授業テーマはTable１にまとめ、毎週の授業はTable２の第１～第５の５セッションで進めた。

Table１　授業テーマ内容

授業週	授業テーマ
１週	教育方法論へのいざない
２週	いじめについて考える（教科書212～216頁）
３週	学校事故を考える（教科書87～94頁）
４週	学校給食について考える（教科書208～211頁）
５週	学級担任になったＡ先生の不安（教科書34～41頁）
６週	担任と児童との関係を考える（教科書58～68頁）
７週	不登校を考える（教科書95～103頁）
８週	指導案作成の説明（別紙プリント）
９週	指導案作成の実践（発表グループで作成する）
10週	指導案発表（各グループの作成指導案を発表する）
11週	学級活動と道徳の違い（教科書120～124頁）
12週	道徳教育と道徳の時間の違い（教科書150～155頁）
13週	生徒指導を考える（教科書175～180頁）
14週	体罰を考える（教科書193～198頁）
15週	授業中の規律指導（教科書217～221頁）

Table２　授業の流れ

セッション	授業の流れ	授業内容	配時
	出席確認	配布資料確認・連絡事項	５分
第１	プレゼン	プレゼン資料の準備	10分
第２	グループ討論	予習内容の討論	25分
第３	各班討論報告	討論内容ポイント報告	20分
第４	教員の説明	教員コメントと補足説明	20分
第５	授業振り返り	自己評価	10分

出欠確認後の第１セッションは、代表グループが教科書の授業テーマに関する箇所について、グループで発表することであった。発表グループはプレゼンシートを作成し、それを発表前に教員に提出して、教員のアドバイスを受けて修正後にプレゼン発表を行った。

第２セッションは、12班編成によるグループ討論であった。各班メンバーは６名で、予習をもとに教科書の問いについて討論を行った。各班の司会係と記録係およびメンバーは毎週変わることにした。メンバーのなれ合いを防ぎ、緊張感をもって討論に臨むことで、対人技能や態度が鍛えられると考えたからである。司会係はメンバーの考えや意見を引き出すことが役割である。簡単に自己紹介をした後、討論活性化のために予習レポートを読み上げたり、レポート作成で各自が問題だと考えた内容を出し合いながらグループ討論を進めた。

第３セッションは、各グループの討論内容を他グループに報告するクラス全体の時間（全体討論）であった。自分の班以外のグループ討論内容を知り、情報共有化を図ることで討論内容の広がりと深まりを確認する時間であった。学生は他グループの討論内容に強い興味関心を抱いていた。

第４セッションは、グループ討論や討論報告について教員のコメント（評価）と授業ポイントの補足説明であった。

第５セッションは、授業に対する振り返りの時間であった。振り返りは自己評価であり、そのためのアンケート調査（16項目と自由記述）を行った。また調査票は、授業中に記載することのないように第５セッション開始時に配布し10分間の記載時間を確保した。なお本研究は、学内の倫理審査委員会の承認を受けて実施された（承認番号No. 27-021）。

３．自己評価

学生の学びと活動性を高める授業ができているか否かを検討するために自己評価を行った。自己評価票は４件法16項目と自由記述３項目で構成した（資料１）。なお、16項目の①はプレゼン、③・④・⑤は授業テーマの到達目標、②・⑥・⑬・⑮はARCS４カテゴリー、⑦は調べ学習、⑧・⑨・⑩・⑪・⑫はグループ討論、⑭は教師としての実践力、⑯は授業全体の満足度を問うものであった。各項目の回答について「あてはまる」を４点、「ややあてはまる」を３点、「あまりあてはまらない」を２点、「あてはまらない」を１点として得点化し平均値を算出した。また「あてはまる」と「ややあてはまる」を込みにして肯定的評価とした。

Ⅲ．結果

１．自己評価について

討論を取り入れた授業を実施した13週分の自己評価について、プレゼン・ARCS４カテゴリー・調べ学習・グループ討論・授業満足度・総合評価・予習時間の14項目の平均点と標準偏差（SD）をTable３にまとめた。

Table３　プレゼン、ARCS４カテゴリー、調べ学習、グループ討論、授業満足度、総合評価、予習時間の平均点と標準偏差

週・平均等＼項目		①プレゼン	②注意	⑥関連性	⑦調べ学習	⑧深い理解	⑨思考修正	⑩討論効果	⑪討論発言	⑫思考深化	⑬自信	⑮満足感	⑯満足度	⑰総合評価	⑱予習時間
２週	平均	3.77	3.46	3.51	2.34	2.80	3.17	3.38	3.51	3.46	2.95	3.70	3.46	79.28	1.88
n=37	ＳＤ	0.42	0.50	0.55	0.77	0.95	0.69	0.67	0.64	0.55	0.70	0.46	0.50	11.15	1.14
３週	平均	3.50	3.47	3.61	3.21	3.50	3.42	3.47	3.50	3.61	3.05	3.79	3.63	80.03	3.12
n=38	ＳＤ	0.50	0.55	0.49	0.57	0.64	0.67	0.60	0.72	0.59	0.65	0.41	0.48	13.17	1.18
４週	平均	3.62	3.69	3.72	3.56	3.75	3.69	3.86	3.78	3.83	3.25	3.78	3.69	83.74	2.76
n=36	ＳＤ	0.49	0.52	0.45	0.50	0.49	0.57	0.35	0.53	0.37	0.76	0.42	0.46	8.93	0.89
６週	平均	3.14	3.41	3.51	3.43	3.57	3.57	3.70	3.68	3.59	3.22	3.62	3.53	79.43	2.71
n=35	ＳＤ	0.48	0.49	0.50	0.64	0.55	0.59	0.51	0.57	0.54	0.62	0.54	0.50	10.99	1.06
７週	平均	3.41	3.51	3.74	3.57	3.74	3.66	3.66	3.77	3.74	3.46	3.80	3.66	83.69	2.66
n=37	ＳＤ	0.55	0.55	0.50	0.55	0.44	0.53	0.67	0.48	0.50	0.65	0.40	0.53	10.66	0.81
11週	平均	3.57	3.49	3.65	3.51	3.70	3.49	3.65	3.73	3.59	3.35	3.84	3.61	80.30	2.78
n=37	ＳＤ	0.50	0.60	0.48	0.64	0.46	0.60	0.58	0.55	0.59	0.62	0.37	0.54	10.18	1.25
12週	平均	3.63	3.49	3.60	3.57	3.57	3.40	3.51	3.46	3.49	3.26	3.69	3.51	79.91	2.47
n=35	ＳＤ	0.48	0.60	0.55	0.55	0.55	0.60	0.65	0.73	0.69	0.69	0.52	0.55	10.35	0.75
13週	平均	3.57	3.39	3.54	3.57	3.71	3.39	3.57	3.71	3.64	3.50	3.79	3.75	79.21	2.56
n=35	ＳＤ	0.49	0.49	0.50	0.56	0.45	0.49	0.56	0.45	0.48	0.57	0.41	0.43	11.71	0.92
14週	平均	3.76	3.49	3.71	3.57	3.71	3.53	3.69	3.63	3.60	3.40	3.80	3.74	81.77	2.29
n=34	ＳＤ	0.42	0.50	0.51	0.49	0.45	0.55	0.52	0.54	0.55	0.55	0.40	0.44	9.04	0.75
15週	平均	3.62	3.59	3.68	3.76	3.86	3.65	3.81	3.76	3.78	3.57	3.78	3.76	86.70	2.43
n=37	ＳＤ	0.48	0.49	0.47	0.43	0.34	0.53	0.39	0.43	0.41	0.59	0.41	0.43	8.53	0.79
10週平均		3.56	3.50	3.63	3.41	3.59	3.50	3.63	3.65	3.63	3.30	3.76	3.63	81.41	2.57
ＳＤ		0.48	0.53	0.50	0.57	0.53	0.58	0.55	0.56	0.53	0.64	0.43	0.49	10.47	0.95

１）プレゼン

①「今日のプレゼンは分かりやすかった」の10週にわたる授業平均点は3.56であり、SDは0.48であった。授業テーマに関する代表グループのプレゼン発表は、肯定的評価であった。

２）ARCS動機づけ４カテゴリー

ARCS動機づけ４カテゴリーについて、授業との関係は次の結果であった。②注意（Attention）は、学生に授業への興味関心や探究心を喚起し、マンネリを避けるとともに「おもしろそうだなあ」と感じさせることであった。注意の10週にわたる授業平均点は3.50であり、SDは0.53であった。関連性（Relevance）は、授業のねらいに親しみを持たせ、課題を受身的にこなすのでなく、目標に向かうプロセスを楽しみ「やりがいがありそうだなあ」と思わせることであった。⑥関連性の10週にわたる授業平均点は3.63であり、SDは0.50であった。自信（Confidence）は、授業のねらいや達成目標を明示し、自分の努力によって理解できたと思える教材にし「やればできそうだなあ」と感じさせることであった。⑬自信の10週にわたる授業平均点は3.30であり、SDは　0.64であった。⑮満足感（Satisfaction）は、授業結果を振り返らせ、授業のねらいに達成した自らを認め、公平な総合評価を行い「やってよかったなあ」と思わせることであった。満足感の10週にわたる授業平均点は

3.76であり、SDは0.43であった。以上のことからARCS動機づけモデルの４カテゴリーに関しては、

10週全体にわたり肯定的評価であった。

３）調べ学習

学生の自らの学びに関する評価項目⑦「分からないことはそのままにせず、自分なりに調べた」の10週にわたる授業平均点は3.41であり、SDは0.57であった。以上のことから、調べ学習は授業全体にわたり肯定的評価であった。

４）グループ討論

グループ討論に関する自己評価は５項目あった。１つ目は⑧「予習段階よりも、授業を受けて深く理解することができた」（以下「深い理解」と略）であった。深い理解10週分の全授業平均点は3.59であり、SDは0.53であった。２つ目は⑨「友達の意見を聞いて、考え方が少し変わったところがあった」（以下「思考修正」と略）であった。思考修正10週分の全授業平均点は3.50であり、SDは0.58であった。３つ目は⑩「今日のグループ討論は、グループ全体としてうまくできた」（以下「討論効果」と略）であった。討論効果10週分の全授業平均点は3.63であり、SDは0.53であった。４つ目は⑪「私はグループ討論で発言できた」（以下「討論発言」と略）であった。討論発言10週分の全授業平均点は3.65であり、SDは0.57であった。５つ目は⑫「私はグループ討論で自分の考えをより深めることができた」（以下「思考深化」と略）であった。思考深化10週分の全授業平均点は3.63であり、SDは0.53であった。以上のことからグループ討論の５項目に関しては授業全体にわたり肯定的評価であった。

５）授業の満足度

ARCSモデルの動機づけの満足感とは別に、90分の授業全体に対する満足度を調べるために、評価項目⑯「今日の授業は全体として満足できるものであった」を授業毎に求めた。10週にわたる満足度の授業平均点は3.63であり、SDは0.49であった。授業全体に対する満足度は、授業全体にわたり肯定的評価であった。

６）授業の総合評価

⑰「今日の授業は、100点満点で何点ぐらいですか」の２学期10週にわたる授業の総合評価の授業平均点は81.41点であり、SDは10.47点であった。授業の総合評価は、授業全体にわたり高い結果であった。

７）予習時間

予習時間を確保するために、授業テーマに関するレポート提出を求めた。⑱「レポート作成にどれぐらいの時間がかかりましたか」の10週にわたるレポート作成の平均時間は2.57時間であり、SDは0.95時間であった。なお、レポート提出は自らの学びを促進し支援するものであり、学生の能動的学習と矛盾するものではない[10]。以上のことから、授業全体にわたり予習時間の確保はできていることが明らかになった。

２．コミュニケーションについて

討論を取り入れた授業を通してコミュニケーションの変化が見られるか否かを調べるために、１週と15週の授業で、コミュニケーション不安尺度を使用した[11]。24項目の質問に対して５件法で回答を求めた。「全くそう思う」を1点、「そう思う」を２点、「どちらでもない」を３点、「そう思わない」を４点、「全くそう思わない」を５点と得点化し平均値を算出した。コミュニケーション不安尺度の変化を調べるデータ分析では同一学生を対象にし、データ分析では、「統計解析アドインソフトエクセル統計2010」を使用した。１週と15週における平均値の比較では、同一母集団で対応のあるｔ検定を行った。平均値の検定では１週と15週の24項目の合計点を比較した結果がTable４であり、１週と15週の各項目を比較したものがTable５である。24項目のうち、有意差が見られたのは13項目であった。

Table４　2群の母平均の差の検定（対応あり）

変　数	１週合計点	15週合計点	差	ｐ値
サンプル対	33			
平　均	78.70	69.46	9.24	0.000
不偏分散	86.34	208.38	102.00	
標準偏差	9.29	14.44	10.10	

Table４から、１週と15週においてコミュニケーション不安尺度に有意差がみられたことは、授業を通してコミュニケーションに対する不安が弱まったと解釈できる。たとえば、Table５の「1小グループの討論に参加するのが嫌いである」の１週平均点は3.03であり、15週は2.18と低くなっていた。この項目は逆転項目であるから、得点が低いほど否定的判断（全くそう思わない・そう思わない）をしており、嫌いであることが弱まったと考えられる。なお他の逆転項目である３、５、13、15、20、23の６項目も平均点が低くなっており、不安が有意に弱まっていた。

Table５　１週と15週におけるコミュニケーション不安の比較

	１週(授業前)		15週（授業後）		p値	有意差
	平均点	ＳＤ	平均点	ＳＤ		
1小グループの討論に参加するのが嫌いである　＊	3.03	0.92	2.18	0.81	0.00	**
2小グループの討論に参加している間、たいてい落ち着いている	2.39	0.79	2.24	0.66	0.36	
3グループの討論に参加している間、緊張したり神経質になったりする　＊	3.15	1.12	2.39	0.86	0.00	**
4グループの討論に参加するのが好きである	3.36	0.82	2.67	0.92	0.00	**
5初対面の人と小グループで討論すると、緊張したり神経質になったりする　＊	3.67	0.99	2.82	1.18	0.00	**
6小グループの討論に参加している間、冷静でリラックスしている	3.06	0.93	2.76	1.06	0.06	
7集会に参加しなければならないとき、たいていは神経質になる　＊	2.91	1.01	2.58	1.00	0.07	
8集会に参加している間、たいてい冷静でリラックスしている、	2.88	0.89	2.67	0.92	0.18	
9集会で発言を求められるとき、とても冷静でリラックスしている	4.06	0.79	3.64	1.08	0.01	＊
10集会で意見を発表するのが怖い　＊	3.61	0.79	3.21	1.02	0.07	
11 集会で話をするとき、たいてい落ち着かなくなる　＊	3.36	0.93	3.06	0.86	0.13	
12集会で質問に答えるとき、とてもリラックスしている	3.91	0.58	3.39	1.03	0.00	**
13初対面の人との会話に参加している間、とても神経質になる　＊	3.18	0.85	2.58	1.00	0.00	**
14会話で意見を述べることをまったく恐れていない	3.52	0.91	2.97	0.95	0.00	**
15会話ではたいていとても緊張したり神経質になったりする　＊	2.79	0.70	2.42	0.79	0.03	＊
16会話ではたいていとても冷静でリラックスしている	2.91	0.68	2.70	0.88	0.21	
17初対面の人と会話している間、とてもリックスしている	3.64	0.70	3.06	1.06	0.00	**
18会話で意見を述べるのが怖い　＊	2.91	0.91	2.58	0.87	0.09	
19スピーチをすることをまったく恐れていない	3.94	0.75	3.55	0.90	0.03	＊
20 スピーチをしている間、体の各部が緊張したり堅くなったりする　＊	2.18	1.01	3.09	1.04	0.00	**
21スピーチをしている間、リラックスしている	3.88	0.70	3.55	0.83	0.05	
22スピーチをしているとき、思考が混乱してしまう　＊	3.52	0.97	3.21	0.78	0.16	
23スピーチを目前に控えて自身をもっていられる	3.61	0.86	3.21	0.86	0.02	＊
24スピーチをしている間、非常に神経質になり、実際にしっていることも忘れてしまう　＊	3.24	1.09	2.94	0.93	0.12	

アスタリスク（＊）のついた12項目は逆転項目

３．ディスカッションについて

同様に、授業を通して学生のディスカッションに関する変化が見られるか否かを調べるために、１週と15週において、ディスカッションスキル尺度を使用した[12]。25項目の質問に対して７件法で回答を求めた。「できる」を７点、「かなりできる」を６点、「ややできる」を５点、「どちらでもない」を４点、「ややできない」を３点、「かなりできない」を２点、「できない」を１点と得点化して平均値を算出した。Table６は１週と15週の25項目の合計点を比較した結果であり、Table７は１週と15週の各項目を比較したものである。25評価項目のうち、有意差が見られたのは17項目であった。Table６と７から、25項目のうち17項目はディスカッションスキルが有意に高くなっていた。

Table６　2群の母平均の差の検定（対応あり）

変　数	１週合計点	15週合計点	差	p値
サンプル対	33			
平　均	103.06	116.36	13.30	0.000
不偏分散	207.12	321.05	122.97	
標準偏差	14.39	17.92	11.09	

Table７　１週と15週におけるディスカッションスキルの比較

	１週（授業前）		15週（授業後）		p値	有意差
	平均点	ＳＤ	平均点	ＳＤ		
1ディスカッションを手際よく進める	3.18	1.10	4.33	1.22	0.00	**
2相手が誰であっても反対意見は堂々と述べる	3.73	1.26	4.36	1.41	0.00	**
3相手の気持ちを理解する	5.61	1.22	5.82	0.98	0.00	**
4自信を持って意見を言う	3.70	1.07	4.73	1.18	0.00	**
5他者の意見を尊重する	5.42	0.90	5.82	0.85	0.06	
6その場にあった話題をうまく提供する	4.03	1.33	4.64	1.25	0.01	**
7明るく楽しい雰囲気を作る	4.24	1.09	4.73	1.46	0.03	*
8思ったことを発言する	4.39	1.20	5.00	1.15	0.00	**
9他者の意見をよく聞く	5.73	1.18	6.21	0.82	0.03	*
10説得力のある話し方をする	3.42	1.20	3.70	1.31	0.13	
11相手の意見を相手の立場に立って聞く	5.09	1.10	5.48	1.12	0.09	
12発言内容をうまく組み立てる	3.88	1.08	4.00	1.03	0.50	
13自分の意見に自信を持つ	3.94	1.20	4.21	1.11	0.23	
14ディスカッションの流れを素早く判断しながら参加者をリードする	3.12	1.11	3.45	1.30	0.16	
15場をうまく盛り上げる	3.52	1.18	4.12	1.58	0.00	**
16他者が納得できるような意見を述べる	3.33	1.14	4.21	1.11	0.00	**
17相手の意見を自分の立場から聞く	4.70	1.07	5.18	1.21	0.02	*
18険悪なムードを取り除く	3.85	0.94	4.21	1.36	0.04	*
19恥ずかしがらずに意見をいう	3.73	1.40	4.64	1.19	0.00	**
20声の調子から相手の気持ちを読みとる	4.48	1.12	5.00	1.17	0.01	*
21ディスカッションの要所で参加者の意見をまとめる	3.48	1.37	4.00	1.20	0.04	*
22疑問点を質問する	3.76	1.17	4.33	1.24	0.02	*
23ユーモアを交えながら話す	3.27	1.10	3.94	1.50	0.02	*
24自分の意見をハッキリいう	4.30	1.21	4.67	1.36	0.08	
25場の雰囲気を理解する	5.15	1.09	5.58	1.17	0.06	

（*<0.05、**<0.01）

４．因子分析によるコミュニケーション構造

グループ討論におけるコミュニケーション不安尺度について質問項目をどのように評価しているかを知るために、24項目の質問に対して５件法で回答を求め、得点化して探索的因子分析を行って潜在変数の抽出を行った。初期値を重相関係数の２乗とし、主成分分析法により５因子を適当と判断した。５因子による累積説明率は69.0％であった。バリマックス回転後の因子負荷量をTable８に示した。

Table８　バリマックス回転後の因子負荷量

因子負荷量 コミュニケーション不安尺度24項目	負荷量					
	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	共通性
24 スピーチをしている間、非常に神経質になり、実際に知っていることも忘れてしまう	0.873	0.060	−0.067	0.169	−0.031	0.799
22 スピーチをしているとき、思考が混乱してしまう	0.788	0.059	−0.016	0.066	0.278	0.706
19 スピーチをすることをまったく恐れていない	0.771	0.224	0.396	−0.045	0.280	0.882
21 スピーチをしている間、リラックスしている	0.670	0.196	0.483	0.030	0.006	0.721
20 スピーチをしている間、体の各部が緊張したり堅くなったりする	0.633	0.011	0.356	0.285	0.061	0.613
13 初対面の人との会話に参加している間、とても神経質になる	0.608	0.340	0.157	0.278	0.047	0.589
4 小グループの討論に参加するのが好きである	−0.063	0.886	0.296	0.009	−0.033	0.877
5 初対面の人と小グループで討論すると、緊張したり神経質になったりする	0.278	0.733	0.344	0.135	0.038	0.752
1 小グループの討論に参加するのが嫌いである	0.365	0.689	0.114	0.225	0.151	0.694
16 会話ではたいていとても冷静でリラックスしている	0.132	0.625	0.213	0.251	0.397	0.675
2 小グループの討論に参加している間、たいてい落ち着いている	−0.113	0.604	−0.105	0.055	0.228	0.444
17 初対面の人と会話している間、とてもリラックスしている	0.387	0.596	0.433	−0.084	0.170	0.728
6 小グループの討論に参加している間、冷静でリラックスしている	0.231	0.526	0.147	0.483	0.105	0.596
3 小グループの討論に参加している間、緊張したり神経質になったりする	0.277	0.500	0.220	0.364	0.114	0.520
12 集会で質問に答えるとき、とてもリラックスしている	0.039	0.264	0.816	0.252	0.155	0.824
9 集会で発言を求められるとき、とても冷静でリラックスしている	0.073	0.232	0.750	0.313	0.199	0.760
23 スピーチを目前に控えて自身をもっていられる	0.480	0.113	0.548	0.053	0.178	0.578
7 集会に参加しなければならないとき、たいてい神経質になる	0.033	−0.003	0.341	0.858	0.053	0.857
8 集会に参加している間、たいてい冷静でリラックスしている	0.154	0.395	0.221	0.673	0.130	0.698
15 会話ではたいていとても緊張したり神経質になったりする	0.411	0.226	−0.011	0.640	0.304	0.723
18 会話で意見を述べるのが怖い	0.294	0.250	0.093	0.088	0.797	0.801
14 会話で意見を述べることをまったく恐れていない	0.055	0.187	0.273	0.181	0.631	0.544
10 集会で意見を発表するのが怖い	0.422	−0.104	0.377	0.302	0.333	0.533
11 集会で話をするとき、たいてい落ち着かなくなる	0.273	0.270	0.499	0.172	0.037	0.427
固有値	9.801	2.480	1.640	1.368	1.051	
寄与率	18.72%	17.37%	13.53%	10.95%	7.51%	
累積寄与率	18.72%	36.09%	49.62%	60.57%	68.08%	

第Ⅰ因子に負荷量の高い項目は、「24スピーチをしている間、非常に神経質になり、実際に知っていることも忘れてしまう」「22スピーチをしているとき、思考が混乱してしまう」「19スピーチをすることをまったく恐れていない」「21スピーチをしている間、リラックスしている」「20スピーチをしている間、体の各部が緊張したり堅くなったりする」「13初対面の人との会話に参加している間、とても神経質になる」であった。１番目の因子は、スピーチをするとき神経質になり思考が混乱する一方、スピーチを恐れてなくリラックスするなどを評価する潜在因子と考え、「スピーチ場面での緊張感」と命名された。

第Ⅱ因子に負荷量の高い項目は、「4小グループの討論に参加するのが好きである」「5初対面の人と小グループで討論すると、緊張したり神経質になったりする」「1小グループの討論に参加するのが嫌いである」「16会話ではたいていとても冷静でリラックスしている」「2小グループの討論に参加している間、たいてい落ち着いている」「17初対面の人と会話している間、とてもリラックスしている」「6小グループの討論に参加している間、冷静でリラックスしている」「3小グループの討論に参加している間、緊張したり神経質になったりする」であった。第２番目の因子は、初対面の相手やグループ討論場面におけるコミュニケーションを行う緊張感や神経質になる気持ちなどを評価する潜在因子と考え、「小グループ場面での不安感」と命名された。

第Ⅲ因子に負荷量の高い項目は、「12集会で質

問に答えるとき、とてもリラックスしている」「9集会で発言を求められるとき、とても冷静でリラックスしている」「23スピーチを目前に控えて自身をもっていられる」であった。第３番目の因子は、グループ討論参加への気持ちの冷静さや落ち着きなどを評価する潜在因子と考え「集会での発言場面での冷静感」と命名された。

第Ⅳ因子に負荷量が高い項目は、「7集会に参加しなければならないとき、たいてい神経質になる」「8集会に参加している間、たいてい冷静でリラックスしている」「15会話ではたいていとても緊張したり神経質になったりする」であった。第４番目の因子は、グループ討論に参加することの好き嫌いなど場面共有を評価する潜在因子と考え、「集会参加の場面での共有感」と命名された。

第Ⅴ因子に負荷量が高い項目は、「18会話で意見を述べるのが怖い」「14会話で意見を述べることをまったく恐れていない」であった。第５番目の因子は、初対面の人を含めた会話をするときの気持ちのリラックスなどを評価する潜在因子と考え、「会話場面でのリラックス感」と命名された。以上のように、コミュニーション不安に関する項目は、「緊張感」「不安感」「冷静感」「共有感」「リラックス感」の要素で構成されていることが明らかになった。

Table９　バリマックス回転後の因子負荷量

因子負荷量 / ディスカッションスキル25項目	負荷量					
	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	共通性
24 自分の意見をハッキリいう	0.819	0.081	0.050	0.210	0.335	0.836
8 思ったことを発言する	0.812	−0.207	0.105	−0.192	0.027	0.751
4 自信を持って意見を言う	0.626	0.041	0.172	0.341	0.267	0.611
2 相手が誰であっても反対意見は堂々と述べる	0.626	0.066	−0.073	0.228	0.162	0.479
17 相手の意見を自分の立場から聞く	0.587	0.261	0.112	0.234	0.234	0.535
22 疑問点を質問する	0.509	0.214	0.368	0.374	−0.233	0.634
11 相手の意見を相手の立場に立って聞く	−0.029	0.767	0.266	0.123	0.036	0.676
5 他者の意見を尊重する	0.035	0.763	0.008	0.053	0.073	0.592
9 他者の意見をよく聞く	0.368	0.716	0.145	−0.137	−0.061	0.691
3 相手の気持ちを理解する	−0.188	0.612	0.282	0.107	−0.020	0.501
20 声の調子から相手の気持ちを読みとる	0.124	0.579	0.179	0.089	0.470	0.612
7 明るく楽しい雰囲気を作る	0.176	0.319	0.864	0.096	0.117	0.902
15 場をうまく盛り上げる	0.043	0.134	0.847	0.320	−0.043	0.841
6 その場にあった話題をうまく提供する	−0.132	0.352	0.621	−0.103	0.137	0.557
23 ユーモアを交えながら話す	0.434	0.023	0.593	0.191	0.116	0.591
18 険悪なムードを取り除く	0.307	0.299	0.526	0.326	0.369	0.702
21 ディスカッションの要所で参加者の意見をまとめる	0.242	0.134	0.288	0.759	0.000	0.735
16 他者が納得できるような意見を述べる	0.464	0.277	−0.073	0.644	0.443	0.909
14 ディスカッションの流れを素早く判断しながら参加者をリードする	0.064	0.010	0.360	0.603	0.143	0.517
1 ディスカッションを手際よく進める	0.057	−0.130	0.252	0.601	0.598	0.802
10 説得力のある話し方をする	0.260	0.079	−0.113	0.559	0.413	0.570
12 発言内容をうまく組み立てる	0.178	0.451	−0.168	0.331	0.657	0.804
13 自分の意見に自信を持つ	0.230	−0.024	0.107	0.028	0.646	0.483
19 恥ずかしがらずに意見をいう	0.495	0.093	0.303	0.242	0.529	0.684
25 場の雰囲気を理解する	0.206	0.457	0.198	0.145	0.415	0.483
固有値	8.658	3.087	2.056	1.699	0.999	
寄与率	34.63%	12.35%	8.23%	6.80%	4.00%	
累積寄与率	34.63%	46.98%	55.21%	62.00%	66.00%	

５．因子分析によるディスカッション構造

ディスカッションスキル尺度がどのような潜在変数から構成されているか調べるために、25項目の質問に対して７件法で回答を求め、その回答に対して探索的因子分析を行った。５因子が抽出されバリマックス回転後の因子負荷量をTable９に示した。

第Ⅰ因子に負荷量の高い項目は、「24自分の意見をハッキリいう」「8思ったことを発言する」「4自信を持って意見を言う」「2相手が誰であっても反対意見は堂々と述べる」「17相手の意見を自分の立場から聞く」「22疑問点を質問する」であった。したがって１番目の因子は、自分の意見を言ったり、思ったことを発言するなど、グループ討論に積極的に貢献することなどを評価する潜在変数と考え、「スピーチ場面での積極性」と命名された。

第Ⅱ因子に負荷量が高い項目は、「11相手の意見を相手の立場に立って聞く」「5他者の意見を尊重する」「9他者の意見をよく聞く」「3相手の気持ちを理解する」「20声の調子から相手の気持ちを読みとる」であった。したがって、第２番目の因子は、グループ討論の場をうまく盛り上げたり、楽しい雰囲気で話し合いが進むことなどに貢献することを評価する潜在因子と考え「発言場面での理解と配慮」と命名された。

第Ⅲ因子に負荷量が高い項目は、「7明るく楽しい雰囲気を作る」「15場をうまく盛り上げる」「6その場にあった話題をうまく提供する」「23ユーモアを交えながら話す」「18険悪なムードを取り除く」であった。したがって、第３番目の因子は、グループ討論において相手に立場を理解して相手の意見をよく聞くことなどに貢献することを評価する潜在因子と考え、「会話場面での雰囲気づくり」と命名された。

第Ⅳ因子に負荷量が高い項目は、「21ディスカッションの要所で参加者の意見をまとめる」「16他者が納得できるような意見を述べる」「14ディスカッションの流れを素早く判断しながら参加者をリードする」「1ディスカッションを手際よく進める」「10説得力のある話し方をする」であった。したがって、第４番目の因子は、他者が納得できる意見を述べるとともに相手の意見を自分の立場から理解することを評価する潜在因子と考え、「討論場面の場づくりと進行」と命名された。

第Ⅴ因子に負荷量が高い項目は、「12発言内容をうまく組み立てる」「13自分の意見に自信を持つ」「19恥ずかしがらずに意見をいう」であった。したがって、第５番目の因子は相手の気持ちを読み取ったり、相手の立場で聞くことなどを評価する潜在因子と考え、「発言場面での自信と主張」と命名された。このように、ディスカッションスキルに関する項目は、「スピーチ場面での積極性」「発言場面での理解と配慮」「会話場面での雰囲気づくり」「討論場面の場づくりと進行」「発言場面での自信と主張」の要素で構成されていることが明らかになった

Ⅳ．考察

本稿は、授業の自己評価をもとに学生の学びと活動性を高める討論授業の効果について検討した。以下、本実践で得られた結果について考察する。

１．学生の意欲的な学びについて

学生の意欲的な学びの検討は、動機づけ４カテゴリー、授業の満足度、授業の総合評価、調べ学習と予習時間を検討した。学生が意欲をもって自らの学びを行うことに関する自己評価は、予習における学習時間と動機づけ効果に左右されると思われたからであり、学生の意欲的な学びには、正課外学習の時間確保が大切なので、学生にそのことをきちんと指導する必要がある。ケース討論型授業は予習課題レポートを求めたが、それは学生の自らの学びを促進するために必要なことである。学生の予習時間に関しては、他大学における２単位講義の授業で教員が正課外に想定する学習時間が30分～１時間という調査結果13）を考えれば、本学学生が12週平均2.90時間を予習にかけていたことは、多くの時間を使って正課外学習をしていたと言える。予習時間が少ない学生では１時間、多い学生は６～７時間をかけており、学習時間の実質的確保は担保されていたと考えられる。

学習時間が多いことをもって学習の質保証がなされたとは言えないが、正課外学習の時間確保は自ら意欲的に学ぶ力を促進する要因であったと思われた。

２．授業の活動性について

学生の活動性については、学生が討論し合い、プレゼンテーションで発表するなどの具体的活動場面を取り入れることや各活動の時間配分も考える必要がある。代表グループによる授業テーマのプレゼン発表は、発表グループが協力して一つの作品を完成する協同学習を体験する貴重な機会であった。各発表グループが協力してプレゼンづくりをした経緯はデータで提示できなかったが、自由記述には次の肯定的評価が多かった。「見やすかったし、声も聞き取りやすくて良かったと思った。ポイントごとにグループの人たちの意見を口頭で言っていて、とても良かった」「分かりやすいパワーポイントでした。教科書だけでなく、ネットを使ってよく調べていたことが分かりました」「配布されたプリントは分かりやすくまとめてあったし、発表も詳しくされていて、声の大きさとか読むスピードとかすごく良かったと思います」。

グループ討論における「深い理解」については、自らがその課題に取り組むことが前提であるが、自分の学習内容を発表すること、仲間との討論・協議や話し合いをすることなどを通して深まるものである。仲間と協同学習を行うことで、相手の話を傾聴し、新しい視点や今まで考えなかったことに気付くこともある。学習や学びは外部から与えられることも必要だが、人や物の関係性の中から深い理解ができるものである。そういう意味では、学生は仲間と討論・協議をすることで深い理解を体験していたといえる。「思考修正」では、仲間の意見を聞き、それを自分に取り入れることで、自分の考えを修正することに肯定的評価であった。そうしたことが可能になるのは、アクティブラーニングとしての討論授業である。自分の考えや意見を恥ずかしがらずに発信することで、自分の考えが深化し修正できたと考えられる。「討論効果」は肯定的評価であり、発言が苦手な学生もグループ討論に積極的に参加してコミュニケーションの力を鍛えたという自由記述が多かった。「討論発言」では、メンバーの発言をメモし、それを見ながら全体討論で発表をしていた。グループ討論のメモを取ることは指示しなかったが、どのグループ内でもメモを取っていたことは、学びに対する積極的姿勢がうかがえた。「思考深化」は、自分の考えがグループ討論で深まったと多くの学生が肯定的評価をしていた。相手の考えを知るとともに、自分の考えを修正しながら深めていたと考えられる。

さらに自己評価に加え、授業前後のコミュニケーションとディスカッションの変化を調べるために、１週授業と15週授業において、コミュニケーション不安尺度とディスカッションスキル尺度の調査を行った。コミュニケーションに関しては24項目中11項目に有意差が見られ、討論授業を行うことで、コミュニケーションに対する不安が改善されたと言える。同様に、ディスカッションスキルに関しては25項目中14項目に有意差があり、授業を通してディスカッションスキルが高まったと言える。

以上のことから、討論授業はコミュニケーションやディスカッションなどの対人関係技能を鍛える場面として機能しており、意欲的に学ぶ力を育成することが可能であり、学生一人ひとりの活動性を高めるのに有効な教育方法であると示唆された。

３．今後の問題点および課題について

本実践の問題点および課題は以下の４点である。第１に、プレゼンでは全員が自分の担当箇所を発表していたものの、グループ討論における司会係とグループ討論内容を全体報告する係が固定化されていたことであった。グループ内での役割は輪番制をとっていたが、多くの場面で特定学生の姿が目立っていた。グループ内の各メンバーが相応の役割を担う具体的方策が必要である。第２に、積極的に討論に参加する学生がいた一方、討論に消極的な学生の姿も見られた。協同学習で大切にされるお互いの学びに対する責任を、どのようにして学生一人ひとりに定着させるかについて

の課題がみられた。第３に、グループ討論中における教員の関わり方であった。机間巡視の時に質問され、それに応えることで討論が中断されたので、どうしたらいいのか思案する場面があった。協同学習の大切さや必要性は学生も教員も理解できていたが、限られた時間内でそれを明確に担保できたかに関しては不十分であった。第４に、ケース教材の内容そのものであった。本実践で使用したケース教材は小中学校の通常教室で見られる内容であったが、学生の大半が養護教諭を目指しているので養護教諭の職務の特殊性に特化したケース教材の開発が必要である。これによりARCS動機づけモデルによる学習意欲の向上がさらに期待できると思われる。今後も学生が意欲的に自ら学ぶ力を培うことを支援していける実践研究を推進したいと考えている。

引用文献

１）安永悟・須藤文．LTD話し合い学習法．東京:ナカニシヤ出版；2014.　pp.167-170

２）小田隆治・杉原真晃（編）．学生主体型授業の冒険．東京：ナカニシヤ出版；2010．p.はじめに

３）安永悟．協同による大学授業の改善．教育心理学年報　第48集　p.164

４）D.W.ジョンソン/R.T.ジョンソン/K.Aスミス．関田監訳．学生参加型の大学授業．東京：玉川大学出版部；2007．pp.11-24

５）経済通産省．社会人基礎力育成の手引き．東京：河合塾；2010.　pp.2-6

６）九州看護福祉大学自己評価・自己点検委員会．
授業評価アンケート結果報告書.2012．p5
http://www.kyushuns.ac.jp/img/about/data/h24_jyugyo_hyoka.pdf　(2016年１月14日取得)

７）John　M.　Keller．鈴木監訳．学習意欲をデザインする．東京：北大路書房；2010．p.47

８）前掲書．P.48

９）杉江修治．協同学習入門．東京：ナカニシヤ出版；2011．pp.1-16

10）山中正樹著「LTD(話し合い学習)の活用と双方向授業の展開による読解力・解釈力向上の試み」ICT活用教育方法研究」第17巻１号　2014年

11）安永悟・須藤文．LTD話し合い学習法．東京：ナカニシヤ出版；2014．pp.169-170

12）前掲書．p.167-168

13）長坂祐二他教育研究推進プロジェクトチーム．学修時間の確保に関する教員の意識調査．山口県立大学学術情報　第６号．p.２

【資料１】 振り返りシート（自己評価票）

H27 年(　　)学科 教育方法論「学級経営を考える」12月14日 氏名（　　）

【各問の当てはまる番号に〇印を付けてください】

４：あてはまる ３：ややあてはまる ２：あまりあてはまらない １あてはまらない

① 今日のプレゼンは分かりやすかった。……４・３・２・１
② 今日の授業は、おもしろかった。……４・３・２・１
③ 学級経営の意味が理解できた。……４・３・２・１
④ 学級担任の役割の重要性が分かった。……４・３・２・１
⑤ 学級崩壊に陥らない学級経営が分かった。……４・３・２・１
⑥ 今日の授業は、やりがいがあった。……４・３・２・１
⑦ 分からないことはそのままにせず、自分なりに調べた。……４・３・２・１
⑧ 予習段階よりも、授業を受けて深く理解することができた。……４・３・２・１
⑨ 友達の意見を聞いて、考え方が少し変わったところがあった。…４・３・２・１
⑩ 今日のグループ討論は、グループ全体としてうまくできた。……４・３・２・１
⑪ 私はグループ討論で発言できた。……４・３・２・１
⑫ 私はグループ討論で自分の考えをより深めることができた。……４・３・２・１
⑬ 今日の授業は、自信がついた。……４・３・２・１
⑭ 今日の授業で考えたことは、教師になってからも役に立つ。……４・３・２・１
⑮ 今日の授業は、やってよかった。……４・３・２・１
⑯ 今日の授業は、全体として満足できるものであった。……４・３・２・１
⑰ 今日の授業は、100点満点で何点ぐらいですか。……（　　）点
⑱ レポート作成は、どれくらいの時間がかかりましたか。 ……（　　）時間

【プレゼン】（感想・意見を聞かせてください）

【グループ討論】（感想・意見を聞かせてください）

【全体討論・教員の説明】（感想・意見を聞かせてください）